

山へ帰ったやまがら

小川未明

青空文庫

英ちゃんひでの飼かっているやまがらは、それは、よく馴なれて、かごから出でると指先ゆびさきにとまったり、頭あたまの上うへにとまったり、また、耳みみにとまったりするので、みんなからかわいがられていました。

はじめのうちは、外そとへ飛とび出だすと、もうかごへはもどつてこないものと思おもつて、障子しょうじを閉しめて、へやの中なかで遊あそばしたものです。しかし、長ながいうちにいつしかかごが、自分じぶんのみかと思おもつてしまったので、すこしばかり遊あそぶと、またかごの中なかへ入はいつてしまいました。そして、ここがいちばん安あんしん心しんだというふうに、頭あたまをかしげて、いままでさわいで疲つかれたからだを、じつとして休やすめるのでありました。

「こんないい鳥とりはめつたにないよ。」と、英ちゃんひでは、平常ふだんから自慢じまんしていました。

「どの鳥とりだつて馴なれれば同じおなじさ。しかし子飼こがいいでないと、なかなかこんなにならないそうだね。」と、兄にいさんがいいました。

お正月しょうがつのある日ひのことでした。空そらにはたこのうなり音おとがしていました。英ちゃんひでは、やまがらに餌えをやつてから、わざとかごの口くちを閉しめずにおきましたけれど、やまがらは、外そとへ出でようとしません。そのとき兄にいさんは口笛くちぶえを吹ふいて、指ゆびを出だして見みせました。する

とやまがらは、ついと飛んできて指に止まりました。

「障子をしめておかなくていい？」と、英ちゃんが、ききました。

「だいじょうぶだろう。外が、怖いんだから。」と、兄さんが答えました。

「空を見ているんだね。」

「さあ、もうかごへおはいり。」と、兄さんは、やまがらに向かつて、指を動かして見せました。

ちようど、裏庭の桜の木にすずめが止まって鳴いていました。やまがらは、その声にでも誘われたのか、ふいに窓から、家の外へ飛び出してしまいました。

「あつ、逃げた……。」と、英ちゃんは、あわてました。

「いま、もどるよ。」と、兄さんは、しきりに口笛を鳴らしながら、やまがらの行方を見守ると、どうして、そんなに羽がよくきくのかと思われるほど、一気に飛んで、やまがらは、隣の屋根を越してしまいました。

「英ちゃん、はやくいつてごらんよ。あつちの林の方へいったようだ。」

兄さんは、自分もかごを持って、後から追いかけていきました。

ある大きな屋敷のまわりは、雑木の林になっていました。ここには、すずめがたくさん

枝えだに止とまって、ふくらんでいます。そのお仲間なかまい入りでもしたように、やまがらが枝えだから枝えだをおもしろそうに伝つたっていました。

「あつ、あそこにいた。」

英ひでちゃんは細こまかな枝えだをとおして上うえを仰あおぎました。

「英ひでちゃん、いた？」

兄にいさんは、かごを木きの下したに置おいて、口くちぶえ笛ふえを吹ふきました。けれど、やまがらは、きこえないふうをしています。英ひでちゃんは、はるか上のやまがらの方ほうに向むかって、できるだけ高たかく手てを上げあげて、小ちいさな指ゆびを出だして見みせました。しかし、やまがらは、もうそんなものには見み向きむきしませんでした。ただ、いままで知しらなかつた大おおきな自然しぜんの中なかで、ななにを見みても珍めずらしいので、忙いそがそうに動うごいて、すこしもじつとしていませんでした。

「兄にいさん、もう帰かえろうよ。」と、英ひでちゃんが、悲かなしそうにいいました。

「晩ばんになったら、帰かえるかもしれない。」と、兄にいさんは、まだやまがらの帰かえるのを信しんじているようでした。

「もう帰かえってこないよ。お家うちがわからないもの。」

英ひでちゃんは、いくつもとこの上あがっている、原はらの方ほうをながめて、自じ分ぶんたちは、二ど度どとあ

のやまがらを見ることがないだろうと思いました。

家へ帰って、かごの口を開けたまま、かごを軒下の柱にかけました。先刻まで、その中には、ほおの白い、胸毛のくり色をした、かわいいやまがらがいたのにと考えると、あんなに馴れていながら逃げたことが、夢としか思えません。

「すずめが鳴いていたので、お仲間入りがしたくなつたんだね。」と、英ちゃんが、いいました。

「きつと、そうだろう、忘れていた山奥の林や、父鳥や、母鳥のことを思い出したのだよ。」と、兄さんが、いいました。兄さんも、いつしか、やまがらは帰つてこないと思つたのでした。

その晩には、寒い木枯らしが吹きすさびました。翌日起きてみると、屋根も、圃も、木のこずえも、霜で真っ白でありました。あらしの中で、はじめの夜を過ごしたやまがらは、どうしたであろうと、兄弟は、心配しました。

「すずめたちと同じ木に止まって、小さくなつて、寝たかしらん。」

「すずめは、やさしい鳥だから、意地悪なんかしないよ。」

「そうだ、僕、鳥屋のおじさんに、きいてみよう。」と、英ちゃんが、いいました。

いつも、学校の帰りに、鳥屋の前に立って、いろいろの鳥を見るので、よく顔を知っているおじさんに、きいてみようと思つたのでした。

あくる日、やまがらのことを心配しながら、学校の帰りに、その店の前までくると、ちようどおじさんは、日当たりの入り口で、鶏の小屋をそうじしていました。そして、英ちゃん、やまがらの逃げた話をして、どうしたろうときくと、おじさんは、ほうきを動かしながら、

「やまがらも、昨夜は、坊ちゃんたちのことを思い出したでしょう。けれど、今日は、もうどこか遠い山の方へ飛んでいって、かごを思つても身ぶるいしていますから、二度と人間の手にはつかまりませんよ。」といいました。

その日から、英ちゃんは、原っぱへいって、朗らかにたこを上げて遊びました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 13」講談社

1977（昭和52）年11月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「僕はこれからだ」フタバ書院成光館

1942（昭和17）年11月

初出：「愛育 7巻1号」

1941（昭和16）年1月

※表題は底本では、「山《やま》へ帰《かえ》ったやまがら」となっています。

※初出時の表題は「山へ帰った山雀」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2018年8月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

山へ帰ったやまがら

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>